

平成 22 年度大学図書館職員短期研修

(京都会場：平成 22 年 10 月 7 日)

(東京会場：平成 22 年 11 月 11 日)

学術情報コミュニケーションの動向

東京大学附属図書館 尾城 孝一

1. 学術情報コミュニケーションとは

1. 1 学術情報の特徴

(1) 内容から見た特徴

- ・内容の整合性が必須
- ・使用される言語が特殊
- ・内容の新奇性が重要

(2) 流通の観点から見た特徴

- ・生産は研究者が独占
- ・一時的な消費も研究者に限定
- ・生産することを目的とした消費
- ・網羅的で徹底的な消費
- ・即時的に消費
- ・固有の情報メディアが存在

1. 2 学術情報コミュニケーション

(1) 学術情報コミュニケーションとは

- ・研究者の研究活動が、創造、評価、編集、整形、流通、整理、アクセス、保存、利用、変換される公式または非公式なプロセス

(2) インフォーマルコミュニケーション

(3) フォーマルコミュニケーション

2. 学術雑誌とは

2. 1 学術雑誌とは

- ・定期刊行物の一種で、特に学術論文を掲載するもの、および（または）特定分野の研究・開発に関する最新の情報伝達を行うもの
- ・フォーマルな学術情報コミュニケーションの要

2. 2 学術雑誌の 4 つの機能

- (1) 登録（先取権の確立）
- (2) 品質保証（査読による質の保証）
- (3) 報知（知見を世に知らせる）
- (4) 保存（知見を後世に伝える）

2. 3 出版流通の仕組み

- (1) 著者（としての研究者）
- (2) 学会
- (3) 商業出版社
- (4) 大学図書館
- (5) 読者（としての研究者）

3. 学術雑誌をめぐる最近の動向

3. 1 商業化

- (1) ビッグサイエンス（20 世紀半ば）が契機
 - ・大規模プロジェクト研究により，研究者の増加と競争激化
 - ・論文数とタイトル数の増加
- (2) 商業出版社の進出
 - ・学会だけで需要に応えることは不可
 - ・新たな出版経路の必要性
- (3) 寡占化
 - ・商業出版社による学術雑誌出版市場の独占
- (4) 価格問題
 - ・通常の商品上昇率を上回る継続的な値上げ→シリアルズ・クライシス

3. 2 電子化

- (1) 電子ジャーナルの普及
 - ・主要な学術雑誌は全て電子ジャーナルで利用可能
- (2) 学術雑誌の質的变化
 - ・所蔵からアクセスへ
 - ・利用の粒度の変化（タイトルから論文へ）
- (3) 機能・利便性の向上
 - ・検索機能，アラート，リンク等

(4) 図書館にとっての課題

- ・新たな契約方式の創出
- ・電子ジャーナルへの的確なナビゲーション
- ・保存の問題

3. 3 オープン化

(1) オープンアクセスとは何か

- ・オープンアクセスとは、学術雑誌に掲載された査読済み論文等の学術情報を、インターネットを通じて無料で提供すること

(2) オープンアクセスを実現するための2つの方法

- ・オープンアクセス雑誌（完全無料型、著者支払い型、ウェブ無料公開型、エンバゴ型、ハイブリッド型）
- ・セルフアーカイビング（著者のウェブサイト、機関リポジトリ、分野別リポジトリ、政府主導リポジトリ）

(3) 成果公開の義務化の動き

- ・研究助成機関による義務化（米国国立衛生研究所のパブリックアクセス方針等）
- ・大学による義務化（ハーバード大学等）

4. 大学図書館の挑戦

4. 1 SPARC 運動

(1) 米国研究図書館連合（ARL）のイニシャティブ（1998年～）

- ・「学術コミュニケーションの主導権を研究コミュニティの手に取り戻す」（ミッション）

(2) さまざまな活動

- ・報知，啓蒙，教育
- ・新しい学術出版モデルの提唱，ビジネスモデル構築
- ・オープンアクセス支援

(3) 世界的な運動に拡大

- ・SPARC Europe, SPARC Japan

4. 2 電子ジャーナルの契約・管理・提供・保存

(1) コンソーシアムによる共同購入

- ・国立大学図書館協会コンソーシアム
- ・公立大学図書館コンソーシアム（PULC）

(2) ERMSによる電子ジャーナルの管理

- ・メタデータ, ライセンス (契約) 情報, アクセス情報の管理
- (3) 新たな情報提供サービス
 - ・電子ジャーナルタイトルリスト
 - ・リンクリゾルバ
 - ・文献管理システム
- (4) 長期的な保存とアクセス保証
 - ・CLOCKSS (スタンフォード大学を中心とした国際的な分散型電子ジャーナル保存プロジェクト) への参画

4. 3 機関リポジトリ

- (1) 機関リポジトリの定義
 - ・大学等の学術機関がその知的生産物を電子的形態で集積し保存・公開するために設置する電子アーカイブシステム
- (2) 機関リポジトリの目的
 - ・現在の学術コミュニケーションの変革を推進
 - ・大学等の学術機関の成果発信 (大学のショーケース)
- (3) 世界の機関リポジトリの現状
 - ・約1,800のリポジトリ
- (4) 日本の機関リポジトリの現状
 - ・約150のリポジトリ
 - ・国立情報学研究所の学術機関リポジトリ構築連携支援事業
- (5) 学術雑誌と機関リポジトリ
 - ・相互補完的な関係

5. 今後に向けて (まとめ)

- ・学術コミュニケーションの主体はあくまで研究者 (研究コミュニティ)
- ・研究者を知り, 理解することが重要
- ・特に, 発信者 (著者) としての研究者に働きかけることがこれからの大学図書館にとって不可欠

参考文献

- 1) 海野敏 [ほか] 著. 『学術情報と図書館』 雄山閣, 1999. (講座図書館の理論と実際, 9)
- 2) 土屋俊 [ほか] 著. 『電子ジャーナルで図書館が変わる』 丸善, 2003. (情報学シリーズ, 6)
- 3) 倉田敬子著. 『学術情報流通とオープンアクセス』 勁草書房, 2007.
- 4) 日本図書館情報学会研究委員会編. 『学術情報流通と大学図書館』 勉誠出版, 2007. (シリーズ・図書館情報学のフロンティア, 7)